

ねこ

小川未明

青空文庫

黒ねこは、家の人たちが、遠方へ引越していくときに、捨てていってしまったので、その日から寝るところもなければ、また、朝晩食べ物をもらうこともできませんでした。しかたなく、昼間はあちらのごみ箱をあさり、こちらのお勝手口をのぞき、夜になると、知らぬ家のひさしの下や、物置小舎のようなところにうずくまって、眠ったのであります。

こうなると、いままでかわいがってくれた人々までが、「そら、どらねこがきた。」といつて、顔を出すと水をかけたり、いたずらつ子は、そばを通ると、小石を拾って投げたりしました。もとは、きれいな毛色であったのが、このごろは、どこへでも入

るので汚よごれて、まことにみすぼらしい姿すがたとなつてしまいました。

それに、黒くろねこは、おいていかれたときには、もうお腹なかに子供こどもがあつたのです。きつと、情なさけを知らぬ主人しゅじんは、「子供こどもを産うむとやつかいだから、捨すてていこうよ。」といつて、後あとに残のこしたのであります。

かわいそうなねこは、どこで、自分じぶんの子供こどもたちを産うんだらいいかと迷まよいました。そして、毎まい日にち、方ほう々ぼうを見みて歩あるきました、ここなら安あん全ぜんと思おもうようなところはなかなか見みつかりませんでした。人にん間げんにも油ゆ断だんがでできなければ、犬いぬや、また、ほかのねこたちにも、けつして心こころを許ゆるせなかつたからです。

こうして、ほどなく母ははねこになろうとする黒くろねこは、自分じぶんの食た

べ物ものを探さがすことよりも、かわいい子供こどもを産うむ安全あんぜんな場所ばしょを見みだすことにいつししようけんめいでありました。

とうとう、人家じんかからはなれた森もりの中なかに、よさそうなところを見みつけました。そして、そこへ子供こどもを産うむ用意よういをいたしました。やがて、三びきのかわいらしい、黒くろと白しろのぶちねこが産うまれました。それからというもの、母ははねこの心しんぱい配はいは、いままでのようなものではなかったのです。自分じぶんたちの隠かくれ場所ばしょに、雨あめや、風かぜが、吹ふき込こんでも子こねこには当あてないようにして、子こねこは、いつもあたかな母ははねこのお腹なかの下したで、安やすらかに眠ねむっていました。

日ひ数かずがたつと、三びきの子こねこは、母ははねこのお腹なかの下したからはい出だして、こおろぎや、かえるなどを追おいかけたのであります。

母ねこは、じつと子ねこたちの遊ぶようすを見守っていました。もし、子ねこたちが、あまり自分から遠ざかろうとすると、「ニヤアオ、ニヤアオ。」といつて、呼び止めました。「あまり遠くへいってはいけない。お母さんが、許すまでは、そんなに遠くへいくことはなりません。」と、さもいいきかせるように見られたのであります。

ところが、ある日、母ねこが、外へ出かけて食べ物をついで、森へもどつてくると、留守の間に二ひきの子ねこは、どこへいったか姿が見えませんでした。犬に食われてしまったか、人につれられていったか、それともみぞの中へ落ちてしまったか、母ねこが、声をからしてあたりをたずねましたけれど、ついに行方がわ

かりませんでした。二ひきの子供こどもを失うしなった母ははねこの悲かなしみはどんなでしたでしょうか？ 一夜やかな悲かなしんで泣なき明あかしました。母ははねこは、せめて残のこった一ひきひきの子こねこをしあわせにしてやりたいと思おもいました。

「こんな森もりの中なかで、いつまでも暮くらさせるのはかわいそうだ。やはりしんせつな人にんげん間まのお世せ話わにならなければならん。」と、母ははねこは、考かんがえました。

母ははねこは、いたずらつ子このない静しずかな家いえをと思おもつて、ある日ひ、子こねこをつれて、一軒けんのお家うちへきました。その家いえには、きれいな奥おくさまとおばあさんの二ふたり人にんが暮くらしていました。

「さあ、おまえは、あの奥おくさまのそばへいってごらん。」といっ

て、母ねこは、子ねこを家の中へ入れて、自分は、物蔭に隠れて、ようすをうかがっていました。子ねこは、すがろうとして、奥さまのひざに上がろうとしました。これを見た奥さまは、「まあ、いやだ」といって、じゃけんに子ねこを外へ投げ出してしまいました。

母ねこは、子ねこをなめて、いたわりました。そして今度は、子供のあるお家へつれてきました。やはり自分は、物蔭に隠れて、ようすをうかがっていました。

その家のお母さんは、いつも忙しそうに働いていました。子ねこが、足もとにきて泣くと、

「まあ、かわいらしいこと、正ちゃんも勇ちゃんもきてごらんな

さい。」と、おっしやいました。子供^{こども}たちは、たちまちお母^{かあ}さんのところへ飛^とんできました。

「やあ、かわいらしいねこだな。お母^{かあ}さん、捨てねこなら家^{うち}で飼^かつてやりましょうよ。」と行って、子供^{こども}たちは、かつお節^{ぶし}を削^{けず}つて、ご飯^{はん}をやつたり、大騒^{おおさわ}ぎをしました。これを見て母^{はは}ねこは、やつと安^{あん}心^{しん}して、

「どうか、達^{たつ}者^{しや}でいてくれるように。」と祈^{いの}つて、自分^{じぶん}はどこへか姿^{すがた}を消^けしてしまつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「愛育」

1937（昭和12）年1月

※初出時の表題は「猫」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ねこ
小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>